

第5章 教育と女性

I. 伝統教育と近代教育の始まり 19世紀から1920年代初期

コ克蘭(J. Cochran)の『エジプトの教育』(E234)は、エジプトの近代教育の歴史的発展に関する概説的な研究書であり、主にアラブ世界へ近代教育と宗教教育のための多数の指導者を送り出し、影響を及ぼし続けてきたエジプト教育の特色を分析するものである。同書によるとエジプトの近代教育は、19世紀初頭に総督ムハンマド・アリーが富国強兵のために、近代的な軍隊養成を目的として始めた軍事教育によって開始された。まず、1809年に学生使節団をフランスに派遣したのを手始めにして、1816年にはコーランや読み書きに加えて外国語(トルコ語、ペルシア語、イタリア語)や軍事科目を教える最初の近代的な学校が設立されている。また、これに引き続いて医学、薬学、経理、軍事などの専門学校が開校されたが、これらの近代的学校教育は、男子だけを対象とし、女子を除外するものであった。

このような近代的教育機関とは別に、カイロには970年に設立されたイスラームの最高学府であるアズハルがあり、カイロはイスラーム世界から広く学生が集う宗教教育の中心的な存在であった。また、その付属学校として中等部4年と高等部5年のマドラサ(学校)がエジプト各地に開設されており、宗教学を中心とした教育制度がすでに確立されていたのである。しかし、このような宗教教育は、女子には教育は必要ないというイスラームの伝統的な解釈によって、女子に対してまったく門を閉ざしたものであった。また、モスクに付設され、コーランの暗唱を中心に文字や算術を教えるクッターブ(寺子

屋式の塾)では、庶民の初等教育において大きな役割を担っていたが、ここに集まる女子も非常に例外的であった。

まず、エジプトにおける女子の学校教育は、ムハンマド・アリーが助産婦学校を設立した1832年に始まる。エジプトの近代的女子教育について述べた文献には、ラムズィー(N. Ramzī)の『労働分野へのエジプト女性の進出』(A285)、ヤヒヤ(M. K. Yahya)の『近代におけるエジプト女性解放の歴史的起源』(A308)などがある。これらの文献は、エジプトの近代教育の始まりを詳細に説明し、当時の女子教育がかなり限定されたものであったことを強調している。

たとえば、ラムズィーの文献(A285)は、この助産婦学校の設立について当時、男性医師が女性を治療しないのが伝統的な習慣であり、また宗教的忌避であったため、医学学校と同様に女医を養成する助産婦学校の建設が必要であったと説明している。しかし、同学校に入学した女子は、強制的に動員されたムハンマド・アリーの召使や奴隷のスーダン人、エチオピア人であったとされ、当時における女子の学校教育の参加がいかに稀であったかがわかる。

またヤヒヤ文献(A308)は、19世紀の女子教育について詳しく紹介するものである。これによると、1835年に西欧の宣教師によって女子のためのミッションスクールが初めて設立され、ムハンマド・アリーの娘たちや貴族の妻たち、彼らの召使らが入学したという。その後、アレキサンドリア、ファイユーム、アシュート、マンズーラなどに次々とカトリック系のミッションスクールが設置された。しかし生徒は、主にコプト教徒か富裕層の女子が中心であったため、

当時の女子教育はかなり限定されたものであった。また、1870年代に総督イスマイル・パシヤは、多くの小・中学校、専門学校を再開し、公立の助産婦学校や看護婦学校の他に、1873年には女子小学校も設立させた。同文献によると、女子生徒のほとんどは、支給される食糧や衣服を得るために集まるアフリカ系移民や下層の貧しい者たちであり、女子小学校は、必要定員に充たない状態であったという。つまり、初期のエジプト政府による女子の学校教育は、家計の手助けのために金銭などを求める下層の女子を対象としたもので、軍服の縫製訓練、助産婦、看護婦の養成、支配階級のメイドのための職業的教育であった。その理由として著者は、当時の上層の子女は、家庭教師などによる個人教授に頼るごく限られた教育を受けており、またその他の階層においては、女子の外出を禁じ、女子教育の必要性を認めないオスマン帝国以来の伝統や慣習がかなり支配的であったことによると述べる。

しかし、19世紀にはリファア・タフターウィーやアリー・ムバーラク('Ali Mubarak)、カーシム・アミンなどのような思想家や啓蒙家が女子教育の必要性を呼びかけていたことが多くの文献からわかる。特に彼らの女子教育に関する主張は、ヤヒヤ文献やムハンマド(A. T. Muhammad)の『エジプトの女性—過去と現代：第3章女性と国民的女性運動』(A303)、アル・サイド(A. M. al-Sayd)の『エジプトにおける女子教育の発展』(社会犯罪研究センター刊『現代エジプトにおける女性の社会的状況変化』の第1章)(A289)などに紹介されている。たとえば、ムハンマド文献(A303)によるとタフターウィーは、『少女・少年ための忠実な導き』(A295)のなかで男子と平等の女子教育の必要性を述べ、19世紀初めとしては非常に開明的な男女共学や女性の労働の権利を説いたことがわか

る。彼は、アズハルのイマームとして留学生たちをフランスへ引率した5年間のパリ滞在中に7月革命を目撃し、民主主義運動の強い影響を受けたという。

また、当時のエジプトの文化の発展に貢献したと言われるムバーラクは、女子教育について「女性には、絶対的に学問を深める権利を有している。夫婦生活とは、労働によって生きるための協力に一緒に参加することである」と記し、女性の教育の権利を認めた。このようにカーシム・アミン以前に西洋に留学した政府指導者や知識人の間には、女子教育を重視する認識がすでにかかなり浸透していたと思われる。

一方、タッカー(J. Tucker)の『19世紀のエジプトにおける女性』(E251)は、当時のエジプト政府の財政状況やイスラーム指導者による女子教育の受入れなどに関連させて論じたものである。同書によると、タフターウィーのような進歩的な知識人が女子教育の必要性を主張したことによって、女子教育に対する関心が高まった。さらに、アズハル改革の指導者のひとりであるラシード・リダーが19世紀はじめにファトワ(イスラーム法の解釈・適用に関する意見書)において女子教育を認めるハディースを引用するに至って、ウラマーの間で女子教育が好意的に受け止められるようになったという。タッカーは、この時期からクッターブに通う女子が徐々に増えたとし、当時のイスラーム指導者層の女子教育への貢献を認めている。これに対して1882年以降のイギリス支配期には、クッターブの女子教育の発展や富裕層の女子を中心とした私学教育の発展がみられた一方で、男女別学制度や家政学を重視した女子教育が進んだと見なしている。これは、当時のエジプト政府の財政危機による教育費の有料化やイギリス的な教育制度が導入されたことによるという。また女子師範学校を除いて女子には高等教育や各種の職業教

育を認めなかった点などからみて、女性の職業機会を制限する傾向を持っていたと批判的に捉えるものである。

II. 教育の国民化 1923～1952

1923年憲法によって6才から12才までのすべての国民に対して初等教育の無料化と義務化が決定され、1925年には女子のための高等教育機関が設立された。続いて1929年に女子に対して大学の門が開かれたことによって、初めて男女平等の教育制度が実現したのである。

この時期の女子教育については、サーリム(L. M. Sālim)の『エジプト女性と社会変化：1919～1945、第3章教育と文化』(A286)や、アブドゥル・バーキー(Z. 'Abd al-Bakī)の『宗教と社会における女性；第10章女性と教育』(A297)に、その進展状況が詳しく叙述されている。たとえば、サーリム文献によると、1919年革命における女性の政治運動への参加を機に、いくつもの女性団体が女性解放に向けてさまざまな運動を展開し、特に男女平等の教育権の獲得に努力していたことがわかる。たとえば、これらの団体は、女子教育の向上のために女学校の建設に参加したり、1920年当時の男子の授業料が10ポンドであったのに対し、女子は12ポンドという差別に対して改善を訴えた。また、この時期に女子教育の発展に努力したナバウィーヤ・ムーサーらは、家政学を中心にした女子教育ばかりでなく、男子と平等のカリキュラム、特に自然科学の授業を取り入れるように要求していた。さらに、1923年以降、ファワード1世大学(現在のカイロ大学)の学長アフマド・ルトウフィ・サイド(Aḥmad Luṭfī al-Sayyid)や文学部長ターハ・フセイン(Ṭaha Ḥusayn)などの努力によって、1929年に教養学部、文学部、医学部、法学部に女子の入学が認められ、大学での男女共学が実現した。さらに、1932年歯学部、1935年商学

部、1936年薬学部、そして、かなり遅れて1945年に工学部、農学部、獣医学部に女子が初めて入学したことなど、この時期の女子教育の発展経緯を知ることができる。

また、当時の女性解放運動家であるシャフィークとアブドゥフ(I. 'Abduh)の『エジプトにおける女性復興の発展：第5章女性教育の復興』(A292)には、女子の大学入学や女性運動を支援したターハ・フセインの当時の努力が叙述されている。

一方、アフラートゥーン(A. Aflātūn)の『私たち、エジプト女性：第3章女性と教育』(A277)には、政府の女子教育政策に対する批判的な意見がみられる。まず彼女は、1920年代以降の女子教育の拡大について、ムハンマド・アリー期の文化的復興政策とは正反対の方向をとる英国の文化支配から脱して、女子教育が復興した時期と位置づけている。そして、その主な要因として女性運動と女性の商工業労働への進出を指摘する。しかし、女子教育に対する政府の政策や社会的世論は、女子教育の奨励とは相反するものであったとして次の4点をあげている。

- (1) 女学校のほとんどの授業料は無料か、むしろ女子教育の拡大のために奨励金を支給していたが、高校の女子学生には多額の授業料を課していた。
- (2) 大学の授業料の無料制度を廃止した。特に女子の多い文学部の有料化は、1946年に決定し、女子の大学進学を妨げる要因となった。
- (3) 男女平等の教育に反対する世論が新聞や雑誌を通じて高まり、また、女子の大学教育に反対する声が繰り返しがかったことが強く影響し、女子の大学生活や受講に支障をきたした。
- (4) 女子学生の海外留学制度を廃止した。

III. 教育の社会主義化 1952～1970

1952年革命以降、エジプトの教育制度は、政府の社会主義的、アラブ民族主義的な政策に沿って再編成された。たとえば、カリキュラムの標準化や私立学校の国有化にみられるように教育政策は、より中央集権的に、また教育の拡大を狙った初等教育、あるいは職業教育を重視した高等教育を中心に置いたものであった。

この時期の女子教育については、特に女子の高等教育の進展を統計学的に分析して比較的好意的に論じた文献が多い。たとえば、アル・サイド(A. M. al-Sayd)の『エジプトにおける女子教育の発展』(社会犯罪研究センター刊『現代エジプトにおける女性の社会的状況の変化』第1章)(A289)やCAPMASから刊行された『20年間におけるエジプト女性, 1952-1972』(A282)(E233)がそれである。

アル・サイド文献は、女子教育の開始から1970年代前半までの歴史的発展を教育段階別に分析するものである。この文献によると、小学校教育では、50年代から70年代には女子の就学者数は飛躍的な伸びを示し3倍に膨らんだが、一方で男女の就学者の割合からみた場合、女子は38%前後のままである。これに対して中学校、高校における女子の就学者数は、特に60年代以降に確実な伸びがみられ、男女比においても1959/60年の女子中学生18%、女子高生26%から70/71年には両者とも32%に増加し、女子の中等教育の拡大がみられる。また、商業中等学校は、99%が女生徒であったが、普通中等教育の拡大とともに学生数が減少したため1967年に廃止され、それに替わって商業高等学校への女子の進学が増加した。その結果、70年代には商業高校における男女の割合は、ほぼ同率になったことがわかる。

国立教育研究センターの『エジプトにおける女性と教育』(A304)も同様である。このなか

で、過去の女子教育の諸問題として、中途退学、農村部における学校不足などをあげているが、その後の30年間における社会・経済環境の変化や学校建設の努力の結果、このような問題はほとんど克服されたと述べている。

また同様に、サーレフ(S. K. Saleh)は、前述の第3章『政治参加に及ぼす力学としての教育』(A294)のなかで過去30年間の女子教育の飛躍的な発展について、

(1) 1978年には、女子の初等教育の割合は全体の39.6%、中等教育では36.1%とほぼ同率となり、50年代はじめと比較し、中等教育がほぼ3倍になった。

(2) 1953年から76年までの人口増加率がおよそ2倍であるのに対し、中等教育における女子の増加率は11.4倍に達した。

(3) 大学においては、男子学生に対する女子学生の割合は、1951年の7.5%から1978/1979年の46.7%に上昇した。また、学部別の男子に対する女子の割合は、文学部47.4%、薬学部44%、教育学部35%、考古学部35%、情報学部63%、言語学部54%、政経学部52%などである。

などの点をあげて肯定的に捉え、さらに情報学部や政経学部への女子の入学増加を女性の政治への関心の増加と位置づける。彼女は、女子教育の発展要因として非識字率の高かった農村の社会変化をあげているが、しかし、この文献は、エジプト全体の女子教育データを示すのみで農村女性の教育状況に関するデータの分析がみられず説得力に欠ける。

これに対して政府の教育政策との関連で論じた文献には以下のようなものがある。

まず、ハワード・メリアム(K. Howard-Merriam)の『エジプトにおける女性と教育と職業』(E242)は、ナセル期以降の女性の教育と職業進出の関係を次のようにまとめている。

(1) 社会・経済開発の推進のために教育システムが拡大し、特に科学技術や職業教育の重視によって女子にも理系の高等教育が拡大した。その結果、今まで男性が優先的に就業していた職業への女性進出が進んだ。

(2) 大卒者に雇用を保障する政府の政策は、女性に特に理系分野への雇用機会を開いたため、性別の役割分担のような伝統的な概念に何らかの変化がみられた。

(3) 各県や地方都市に職業学校、高等学校、大学が多く設立された結果、農村女子の高等教育がわずかに拡大したが、しかし、実際には都市の上・中間層にのみ高等教育の機会が限定されたままであった。

(4) 教育と雇用政策が男女双方に熟練した人材の供給過剰を招いた結果として、女性の法的地位の改善運動とは逆に、女性の伝統的な家庭責任を要求するような動きがみられるようになった。

また、イスラヘル・シェルビーニ(Islahel-Sherbini)の『エジプトに関するワーキングペーパー』(経済生活における女性の参加に関する国連セミナー)(E243)は、革命後の教育政策を肯定的に捉えるものである。国家が意図した学校教育は、女性に家庭内における生活環境の改善や収入向上への援助、国家開発計画の概要を理解させるような、女性たちを啓発するものを準備したと見なす。

しかし、教育政策の質的な側面を批判的に捉えたものに、スマック(A. C. Smock)とユーセフ(N. H. Youssef)の『エジプト；隔離から限られた参加』(『女性、8カ国における役割と地位』第2章)(E249)がある。彼女らは、エジプトの教育システムは理論的には男女平等の教育機会を提供するものであったとしながらも、男性と同等の社会的役割を女性に準備することを意図したものではなかったとみている。特に、すべ

ての教育段階においてなされていた宗教教育の強調は、女性をめぐる問題に対する保守的な態度を助長するものであると批判する。

これらの文献以外にも、20世紀中頃における女子教育の発展について述べたものは多い。たとえば、包括的に女子教育の発展状況を述べたスレイマン(M. A. Suleiman)の『エジプトの女子教育の発展』(A288)や、1950～60年代の大学教育について分析したシャルーニー(T. al-Shārūnī)の『エジプトの若い女性と大学教育』(A290)、また同様に大学の学部および分野別に女子教育の発展を扱ったアル・サイード(S. M. al-Sa'īd)の『女性と大学教育』(A287)がある。さらに、女子の職業教育の進展について扱ったものには、マフラズ(Z. M. Mahraz)の『都市の女性に対する教育の必要性』(A302)がある。

IV. 女子教育の現状と問題点

女子教育の現状については、統計指標を把握することによって大まかにその進展および拡大の方向性を知ることができる。まず、CAPMASの『人口センサス』(A280)は、国民全体の教育程度や識字に関する指標を提供している。また、最も入手しやすい資料としてCAPMASの『統計年鑑』(A281)がある。これらから教育の全課程における男女の入学割合、各課程における学齢に達している人口数に対する登録者割合、各課程の総合試験における合格率、退学率などに関する男女別の統計が入手できる。さらに、小・中学校、高校(普通、実業)、大学などの学校教育に関する指標は、教育・訓練省の『統計年報』(A305)から得ることができる。しかし、基礎教育における落第や中途退学に関する指標や農村と都市別の統計が発表されてはいるが、その原因を示すような経済的、社会的な問題を分析した研究は少ないようである。特に、最近のエジプト人研究者の文献は、主に大学な

どの高等教育における女子の増加を扱う傾向が強く、基礎教育や教育の質に関する研究は少ないようである。また、女子教育に対する環境や階層間の相違の影響、都市と農村の女子教育の発展の相違などを扱った研究が少ない。そのなかで、エジプトの農村社会に関する研究を手がけているアブドゥル・マアティー(A. Abd al-Ma'ati)らの『開発における農村女性の参加』(ESCWA刊行)(A278)などが、農村の女子教育の問題に触れている。

同書は、農村の男性や都市の女性との比較において農村女性の非識字率の高さ、小学校の入学率の低さ、中途退学率の高さなどを指摘し、次のように述べる。「教育の必要性の認識において農村女性と都市女性、および農村女性と農村男性の間には大きな相違がある。すなわち、それは女性には教育費をかけない傾向に現われている。このような女性に対する教育の軽視は、女性に対する労働機会の縮小を導き、賃金や社会的地位における低下を意味する。現在の教育システムは、たとえば、小学校6年の「講読」科目に含まれるように、女性は常に、統率し保護してくれる人を探しているというような意識、労働や国民的闘争、統率力、知性において男性より劣るようにみる思想、さらに女性を否定的に捉える思想を含む傾向にある。」さらに同書は、政府の非識字解消、職業訓練に関するプロジェクトについて次のように批判している。

- (1) ほとんどの実業高校や訓練センターは都市に集中し、これらは、生産的なプログラムと技術教育、およびモデル的な実業高校制度として産業と結びついたものである。
- (2) ラジオやテレビにおける非識字解消プログラムは、その構成や時間、用いる言語や内容の点において、また实际的に農村女性の関心を高める効果においてあまり期待できないものである。

主に非識字問題を基礎教育との関連で分析したものに、ルトゥフィー(K. Luṭfi)の『エジプトの非識字問題』(A301)がある。まず著者は、非識字者を初歩的な非識字者(ummīya abjadīya)と機能疾患的な非識字者(ummīya wazīfiya)に分けて説明する。前者は、一般に10才を越えた段階で読み書きの能力がない者を意味し、後者は、読み書きの能力が劣り、読み書きを必要とする職に適さない者で、小学校卒業程度の学力水準では明らかにこの層に含まれるという。経済社会開発の障害となっているこの種の非識字者の数は、非識字率に含まれていないため、これを特定する必要性を指摘し、さらに結論として著者は、1920年代以降に始まった政府の非識字解消のための多くの試みが失敗に終わっている理由について以下の点をあげる。

- (1) 非識字者解消政策に対する予算が貧困で、またそのプログラムが不備である。
- (2) 非識字者の90%が農業労働者や専業主婦であり、読み書きの必要性を感じていないし、またその必要性を説くプロジェクトがない。
- (3) 1976年には非識字者全体の62.1%が女性、特に、56.5%が専業主婦であるにもかかわらず、女性を対象とした政策がなく、女性が社会的慣習の点において嫌う男女共学のクラスのみである。

さらに、非識字者を生み出す第2の原因として初等教育における退学問題をあげ、特に1973年以降の物価上昇や教育費の増加によって退学者が増加したことを指摘している。また都市より農村、男性より女性の退学率が高いことから、いまなお女性の早婚の習慣や父親の女子教育に対する意識の低さ、教育よりも家事労働の優先といった社会的障害が存在することに言及する。

ルトゥフィーと同様に、アル・アブド(A. A. al-'Abd)の『農村の女性』(A296)も、中学校への進学者が約25%であるため、残りの75%は、

小学校卒業以降に徐々に非識字者に戻ってしまう可能性が高いことを指摘している。

1980年以降における女子教育の問題を扱った研究は少ないようである。ここでは1点だけ紹介するに留める。

アティーヤ(S. Attiya)の『女性教育』(E229)は、1971/72年から1986/87年のエジプトにおける女子教育の変化を、基礎教育(1987年以降、小学校教育は6年制から5年制に短縮され、小学校と中学校教育の3年を合わせて基礎教育と呼ぶ)、中等教育(3年)、高等教育(3年)にわけて統計的に分析する。著者は次のような変化の特徴を指摘する。

- (1) 全教育課程において男女の就学率における格差が存在する。
- (2) 各教育課程において女子の入学が上昇し、識字率も上昇傾向にあるが、未だに女性人口の3分の2程度が非識字者である。また、近年においても各教育課程の全体における女子の割合は45%を越えない。
- (3) 基礎教育において女子の大多数は普通教育に進み、アズハル教育(宗教省の管轄下に置かれた教育制度。宗教学を中心とした小学校から大学までの一貫教育で、エジプト全土にその付属学校がある)に進む割合は少ないものの、近年増加がみられる。中等教育では多数が実業高校に進学し、訓練専門学校(Training College)では男子と同率あるいは女子がわずかに多い。
- (4) 近年、大学における女子の割合は、全学生の約3分の1を占めるに至り、特に女子大生の多数は、人文学系に進学している。
- (5) 小学校の退学率は男子よりも女子の方が高いが、近年では男女の相違はほとんどない。

進級および進学試験の合格率は、男子より女子の方が高い。

- (6) 職業訓練プログラムにおける男女の割合は、各県によってかなり格差があるが、職業訓練センターにおける退学率は女子の方が高い。

ところで、第2章であげたアル・ギンディー(F. el-Guindi)の『ベールを被った行動主義：現代イスラーム運動におけるエジプト女性』(E238)は、イスラーム的現象と女子教育の関係を女子の大学進学増加の側面から分析したものでもある。著者はまず、エジプトの過去25年における男女の学生比を分析することによって、女性の社会文化的方向性を探る。これによると、カイロ大学、アインシャムス大学、アレキサンドリア大学の3大学における男女の比率が1952/53年の13.2:1に対して1975/76年には1.8:1と大幅に格差が縮小している。この比率は、小学校における男女比1.6:1とほぼ同等になってきているという。著者は、学部専攻別の男女比において理論系(nazarī: theoretical)と比較して応用学系('amalī: practical)の学部女子の比率が増加している傾向に注目するものである。特に、女子の教育傾向とイスラーム運動の観点からこれらのデータを考察している。たとえば、女子の増加傾向は、大学入学試験において高得点が必要とする医学部、工学部、獣医学部、薬学部、歯学部の5学部にみられるという。これらは、イスラーム運動が最も活発で、ムスリム同胞団員、ムスリム女性同胞団員が多い学部である。著者は、「ソフト」分野に進む西欧女性の傾向とは正反対に、エジプト女性の「ハード」分野への志向を指摘し、これによって男女共学が進展していると捉えている。

<文献目録—アラビア語>

- (A276) أحمد، أحمد طه : المرأة كفاحها وعملها . القاهرة ، دار الجماهير ، 1964 . 120 ص .
- (A277) أفلاطون ، انجي : نحن .. النساء المصريات . القاهرة ، 1949 . 114 ص
- (A278) الأمم المتحدة . اللجنة الاقتصادية والاجتماعية لغربي آسيا : مشاركة المرأة الريفية فى التنمية - دراسة حالة لبعض المشروعات الانتاجية فى القرية المصرية . تأليف عبد الباسط عبد المعطى وآخرون . بغداد ، 1988 . 114 ص .
- (A279) جاد الله ، سعاد : أثر التدريب المهنى فى انتاج المرأة . (مؤتمر شئون المرأة العاملة) القاهرة ، وزارة الشئون الاجتماعية ، 1963 : ص 151-162 .
- (A280) الجهاز المركزي للتعبئة العامة الاحصاء : التعداد العام للسكان والاسكان لسنة ، 1960 ، 1976 ، 1986 . القاهرة ، 1963 ، 1978 ، 1987 .
- (A281) الجهاز المركزي للتعبئة العامة والاحصاء : كتاب الاحصاء السنوي للسنوات 1952-1991 . القاهرة ، 1992 .
- (A282) الجهاز المركزي للتعبئة العامة والاحصاء : المرأة المصرية فى عشرين عاما . القاهرة ، 1974 . 78 ص .
- (A283) حسن ، عبد الرؤوف : الطبيبات المصريات وطالبات الطب - أثر رائع من آثار النهضة النسائية فى مصر . المجلة الطبية المصرية (16) 12 : ص 711-715 .
- (A284) خليفة ، اجلال : أثر تعليم المرأة على المشكلة السكانية فى مصر . دراسات سكانية (26) 1976 : ص 22-32 .

- (A285) رمزي، ناهد: تطور خروج المرأة المصرية الى مجال العمل. (تغير الوضع الاجتماعي للمرأة في مصر المعاصرة، اشراف مصطفى سويف) القاهرة، المركز القومي للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1974: ص 82-173.
- (A286) سالم، لطيفة محمد: المرأة المصرية والتغيير الاجتماعي، 1919-1945. القاهرة، الهيئة المصرية العامة للكتاب، 1984. 201 ص.
- (A287) السعيد، السعيد مصطفى: المرأة والتعليم الجامعي. الاسكندرية، جامعة الاسكندرية، 1955. 17 ص.
- (A288) سليمان، مصطفى أمين: تطور تعليم البنات في مصر، دراسات وبحوث حثائية. وزارة التربية والتعليم التنفيذ بالاقليم الجنوبي، 1959: ص 101-110.
- (A289) السيد، عبد الحليم محمود: تطور تعليم البنات في مصر. (تغير الوضع الاجتماعي للمرأة في مصر المعاصرة، اشراف مصطفى سويف) القاهرة، المركز القومي للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1974: ص 8-81.
- (A290) الشاروني، شابت: الفتاة المصرية والتعليم الجامعي - دراسات وبحوث احصائية، الكتاب الثاني. القاهرة، وزارة التربية والتعليم التنفيذية بالاقليم الجنوبي، 1960: ص 83-96.
- (A291) شفيق، أمينة: مشاكل تعليم المرأة في مصر. مجلة دراسات اشتراكية (8) 3، اغسطس 1974.
- (A292) شفيق، درية و ابراهيم عبده: تطور النهضة النسائية في مصر. القاهرة، مطبعة التوكل، 1945. 151 ص.
- (A293) الشنواني، هيفاء: التعليم ودور المرأة في التنمية الريفية في مصر. (الحلقة الاقليمية عن دور التعليم في التنمية الريفية في البلاد العربية، سرس اللبان، 7-12 نيسان/ابريل، 1984)

(A294) صالح، سامية خضر: التعليم كقوة دينامية تؤدى إلى المشاركة السياسية .
(المشاركة السياسية للمرأة وقوى التغير الاجتماعى، الفصل الثالث)
القاهرة، المصدر لخدمات الطباعة، 1989: ص. 87-122.

(A295) الطهطاوى، رفاعه رافع: المرشد الأمين فى تعليم البنات والبنين.
القاهرة، دار المعارف.

(A296) العبد، عاطف عدلى: المرأة الريفية. القاهرة، دار المعارف، 1983.
163 ص

(A297) عبد الباقي، زيدان: المرأة بين الدين والمجتمع. القاهرة، مكتبة
النهضة المصرية، 1977. 352 ص.

(A298) عبد المسيح، ممدوح فريد: تعميم التعليم الابتدائى فى الجمهورية
العربية المتحدة. القاهرة، المركز الديموجرافى لشمال أفريقيا،
1966. 54 ص.

(A299) عبد المعطى، عبد الباسط: التعليم وتزييف الوعى الاجتماعى - دراسة
فى استطلاع مضمون بعض المقررات الدراسية. مجلة العلوم الاجتماعية
شتاء 1984.

(A300) علوى، علوية: الاحتياجات التعليمية للمرأة الريفية. المجلة آراء
فى التعليم الوظيفى للكبار (1) 1975: ص. 55-65.

(A301) لطفى، خالد: مشكلة الأمية فى مصر. دراسات سكانية (62)
1982: ص. 3-47.

(A302) محرز، زينب محمود وفاطمة زكى: الاحتياجات التعليمية للمرأة
الحضرية. مجلة آراء فى التعليم الوظيفى (1) أكتوبر 1975.

(A303) محمد، أحمد طه: المرأة المصرية بين الماضى والحاضر. القاهرة،
مطبعة دار التأليف، 1979. 254 ص.

(A304) المركز القومي للبحوث التربية: المرأة والتعليم فى جمهورية مصر
العربية. القاهرة، 1980. 131 ص.

(A305) مصر. وزارة التربية والتعليم. ادارة الاحصاء: التقرير الاحصائى للسنوات. القاهرة 1960-1990.

(A306) مصر. وزارة التعليم العالى: المرأة فى مصر. القاهرة، الادارة العامة للنشاط الثقافى والعلمى بوزارة التعليم العالى، 1975.
159 ص .

(A307) مصليحي، كريمة: المرأة والخدمات الاجتماعية والتعليمية والصحية.
(ندوة المرأة والتنمية القومية) القاهرة، المركز الاقليمى العربى للبحوث والتوثيق فى العلوم الاجتماعية، 1984: ص 104-110.

(A308) يحيى، محمد كمال: الجذور التاريخية لتحرير المرأة المصرية فى العصر الحديث. القاهرة، الهيئة المصرية العامة للكتاب، 1983. 131 ص .

< 文献目録—欧語 >

- (E224) Abdul Qayyum Shah : Women in the Muslim world ; a case study of Egypt. (Women of the world, edited by Urmila Phadnis & Indira Malani) New Delhi, Vikas Publishing House, 1978 : p. 151-174.
- (E225) Abu Zayd, Hikmat : The education of women in the U.A.R. during the 19th and 20th centuries. Cairo, Egypt Commission for UNESCO, 1970. 43 p.
- (E226) Ali, Parveen Shaukat : Education ; Egypt. (Status of women in the Muslim world) Lahore, Aziz Publishers, 1975.
- (E227) Aliyah, Muhammad Kamil el-Bindary : A cultural approach to nursing education in the UAR. (Ph. D. dissertation - Boston University) 1965.
- (E228) Aly, Hassan Y. & Richard Grabowski : Education and child mortality in Egypt. World development 18(5) May 1990 : p. 733-742.
- (E229) Attiya, Shadia : Women education. Cairo. 1991. (IDRC report)
- (E230) Brantjes, Sonja : The education of Egyptian women. Mainstream 25(52) Sept. 12, 1987 : p. 19-22, 24.
- (E231) Central Agency of Public Mobilization and Statistics : The general population and housing census. 1960, 1976, 1987. Cairo, 1963, 1978, 1987.
- (E232) Central Agency of Public Mobilization and Statistics : Statistical year book, 1952-1991. Cairo, 1992.
- (E233) Central Agency of Public Mobilization and Statistics. Population and Research Studies Center : The Egyptian woman in two decades, 1952-1972. Cairo, 1974.
- (E234) Cochran, Judith : Education in Egypt. London, Croom Helm, 1986. 161 p.
- (E235) Chabaud, Jacqueline : The education and advancement of women. Paris, UNESCO, 1970. 155 p.

- (E236) Eliraz, G.: Egyptian intellectuals and women's emancipation, 1919-1939.
Asian and African studies 16(1), 1982 : p. 95-120.
- (E237) el-Guindi, Fadwa : Religious revival and Islamic survival in Egypt. International insight (1) 1980 : p. 6-10.
- (E238) el-Guindi, Fadwa : Veiled Activism ; Egyptian women in the contemporary Islamic movement. Peoples méditerranéens (22/23) Jan./June 1983 : p. 79-89.
- (E239) al-Hamamsy, Laila Shukry : The changing role of the Egyptian woman. Middle East forum 33(6) 1958 : p. 24-38. (Reprint edition : Readings in Arab Middle Eastern societies and cultures, edited by Abdulla M. Lutfiyya & Charles W. Churchill. The Hague, Mouton, 1970 : p. 592-601.)
- (E240) Harby, Mohammed Khayri, & Zeinab Mahmoud Mehrez : Education for women in the U.A.R. Cairo, General Organization for Government Printing, 1961. 46 p.
- (E241) Harby, Mohamed Khairy & Z. M. Mehrez : Education for women in the United Arab Republic. Oversea quarterly (1) Dec. 1959 : p. 241-243.
- (E242) Howard-Merriam, Kathleen : Women, education, and professions in Egypt. Comparative education review 23, June 1979 : p. 256-270.
- (E243) Islahel-Sherbini : Working paper on Egypt. (United Nations seminar on the participation of women in economic life) Libreville, 1971. (SO 245/3(9))
- (E244) Kesler, Suad Wakim : Values of women college students in the Arab Middle East. (Ph. D. dissertation - Cornell University) 1965.
- (E245) Khattab, Hind Abou Seoud & Syada Greiss el-Daeif : Female education in Egypt ; changing attitudes over a span of 100 years. (Muslim women, edited by Freda Hussain) Beckenham, Croom Helm, 1984 : p. 166-197.
- (E246) al-Mu'tasim, M.: The education of females in modern Egypt. (Ph. D. dissertation Manchester University) 1954.

- (E247) Reid, Donald Malcolm : Cairo University and the making of modern Egypt. Cairo, American University in Cairo Press, 1990. 296 p.
- (E248) al-Sanabary, Nagat : Continuity and change in women's education in the Arab states. (Women and the family in the Middle East ; new voices of change, edited by Elizabeth W. Fernea) Austin, University of Texas Press, 1985 : p. 93-110.
- (E249) Smock, Audrey Chapman & Nadia H. Youssef : Egypt ; from seclusion to limited participation. (Women, roles and status in eight countries, edited by Janet Z. Giele & Audrey C. Smock) New York, John Wiley & Sons, 1977 : p. 35-79.
- (E250) Szyliowicz, Joseph S.: Education and modernization in the Middle East. Ithaca & London, Cornell University Press, 1973. 477 p.
- (E251) Tucker, Judith : Women in nineteenth century Egypt. Cambridge, Cambridge University Press, 1985. 251 p.
- (E252) Vial, Charles : Rifa'a al-Tahtawi (1801-1873) précurseur du féminisme en Egypte. Maghreb-Machrek (87) Jan./Mar. 1980 : p. 35-48.